

五人と一人の高校生が 舞台上に立った

五〇〇人を超す聴衆の視線の先にある舞台へと並んだ五人と一人の高校生

それぞれの思いを胸に

ある子は 一日足りと癒えることのなかった傷 小学三年生のとき 涙した

「差別落書き」を この日 再び乗り越えようと

ある子は けっして人前で見せなかった涙を 愛する家族の前ではあったが  
自分に流させた その「差別の非道さ」を明かすために

ある子は 差別に負けてしまいそうな自分を強くしたいと

また ある子は 「差別をなくすことは正しいこと」という単純明快な理由で

また ある子は 自ら語ることで「希望」をつかみたいと

五人は 舞台 下手に並んだ

その子は ネット上の「差別情報氾濫」に危機感を抱き 「差別落書き」の

事実を知り驚愕した これは なんとかしなければと声をあげるために

一人 少し離れて上手に立った

数限りない差別情報がうごめき増幅しつづけている電子空間と

二〇一八年 「差別落書き」された市内公共施設の壁という身近な空間  
仮想と現実はつながっている

六人は 六年の時空を超えて高校生となり 出会った

「差別はゆるされない」という明白な真理が壊されている現実を前に

今 このときも高校生たちは 抗いつづけた

五〇〇人を超す聴衆は 涙ながらに大きな拍手をおくった

感動と感銘の称賛に うそはない

しかし 高校生たちが 望んでいるものは一時の称賛ではないはず

「差別されない権利」をみんなのものにしていくために 舞台上で声をあげた

「差別は絶対に 人の力でなくしていく」と 当たり前のことと言った

ただ それだけのことなのに 涙がでるほど 心ゆさぶられた

なぜだろう そっと胸に手を当て 思いをめぐらす

